

播磨のエクソシスト



『知るほどはまる姫路城トリビアン』という姫路城にまつわる小ネタ集があります。今年1月にそのPart1が出たところで、姫路市観光交流推進室がweb配信しています。Part1には載っていないのですが、裏を取れるなら、是非、続編に載せて欲しいネタがあります。それは、池田輝政が「クリスチャン」だったという話です。この話は、『世界文化遺産・国宝姫路城—これさえあれば楽しく歩けるお城観光案内—』（姫路城研究会、2005。以下、案内とする）で「18.クルスの瓦」の説明文にありますので、下記に示します。

「にの門」西向きの唐破風の屋根上の鬼瓦に、クルスの紋がある。

姫路城主でクリスチャンは黒田官兵衛と池田輝政であるが、官兵衛が姫路城(当時姫山城)にいた天正八年には、まだ洗礼を受けておらず、クリスチャンになっていない事から、池田輝政の家紋と考えられる。輝政が死んだ慶長十八年、幕府は各藩にまで禁教を指示していない。

いったい典拠は何なのでしょう。思い当たる書物をいろいろと繰っていると、偶然、高橋賢一『大名家の家紋』（秋田書店、1974）の池田氏の項で輝政をクリスチャンとしているのに遭遇しました。その根拠は、池田氏はもともと摂津池田の出身であり、当地は戦国時代摂津におけるクリスチャンの一大根拠地であったこと、そして池田氏の替紋である祇園守紋がクルス紋の変形であることの二点でした。池田氏が摂津池田出身の可能性も否定はできないのですが（『大名池田家のひろがり』鳥取市歴史博物館、2001）、先祖の出身地がクリスチャンの根拠地だから、輝政（尾張出身）もクリスチャンになったと言うのでは説得力に欠けます。祇園守紋も『甲子夜話』巻二「中川氏并鳥取侯家紋の事」に依拠するもので、沼田頼輔『日本紋章学』（明治書院、1940）で唱えられて広まったようですが、すでに松田毅一氏によって根拠のないことが指摘されています（「クリスチャン紋章説と中川久留子」『大分縣地方史』54・55、1970）。明確な証拠が欲しいところです。



池田家の
祇園守紋

試みにインターネットで調べてみると、輝政＝クリスチャンとするwebサイトがありましたが、典拠は不明。しかし、そのなかで一つ参考文献を明示したサイトがあり、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』を参考に挙げていました。この文献は岩波文庫に収められているので、そこから輝政＝クリスチャンの記述を探してみました。すると、次のような記事（1611年）がありました。

同地（播磨国）には、受洗者が五百人もあり、その大部分が侍であり、殊に城下姫路に於いてさうであった。池田三左衛門殿と言ふ大名が、この町に住んでいた。…四人の重臣が、クリスチャンとして告訴され

た。…その中の一人は転び、他の三人は堅く信仰を守り通して追放された。

このあともう少し続く記事は、要は、クリスチャンを迫害すると城中の人口が減ってしまったり、優秀な家臣さえも失ってしまうので、輝政は、以後、信仰については自由にした、という内容です。



パジェスは『日本切支丹宗門史』の執筆にあたり、色々な史料を参照したはずですが、附録史料編が未刊行のため、参照した具体的な史料を知ることが現段階では困難です。そこでとりあえず、手許にあつてすぐに読めるクリスチャン関係の史料集を見ることにしました。すると、『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅱ期第1巻（同朋舎、1990）の「播磨の国で生じたクリスチャン迫害」の章で、左記の「四人の重臣」の経緯も書かれていました。すなわち輝政は自領にクリスチャンはいないと公言しつつも、クリスチャンを憎悪する法華僧の策略にのり「四人の重臣」に改宗を迫ったのでした（輝政は異教徒、あるいは「暴君」として記述される）。また、以下は城内でのある事件に関する記事です。

播磨の国の、その地の殿が住む城と御殿に接する異教徒のある町で、悪魔が或る女にとり憑くということがあった。…彼女は獐猛な牝ライオンのように家を出て、…誰も彼女を阻止できなかった。そしてこの勢いと狂暴さをもって城に入った。…城(にいる)奥方にさえも容赦せず、ついには無数の狼藉を働いた。しかし、その奥方に仕える或るクリスチャン女に出会い、彼女に気づくと、悪魔に憑かれた女は逃げ出した。（「1606,1607年日本の諸事」、前掲報告集第Ⅰ期第5巻）

このあと、悪魔に憑かれた女は顔を覆って「クリスチャンは恐ろしいものだ」と言い、奥方が腰元に「この女はなぜお前から逃げたか」を問いました。腰元は自分が首に掛けている守り袋（アグヌス・デイ）のせいだろうと答え、この女の上に置くと静かになりました。守り袋に悪魔祓いの効能があることを知った多くの異教徒が守り袋を拝み、クリスチャンの話聞くのを望んだそうです。

こうした記事から、もしかしたら播磨国内では池田時代にクリスチャンが最も増えた時期だったのかもしれない。それも「その国で受洗した人たちの中に、公方の息女であるその国の領主の奥方（督姫か）に仕える高貴な若い婦人が二人いた。彼女たちは、その御殿の他の女たちがやはり以前に行ったように、我らの聖なる教えの真実をよく理解して受洗した。」（前掲報告集第Ⅰ期第5巻）とありますから、クリスチャンが重臣ばかりか、城主家族の極めて近いところにまで浸潤していたことが察せられます。弾圧したら城中の人口が減るとまでいうのですから、数も少なくなかったのでしょう。

案内には「28.石垣の地蔵」のようなフィクション（大西秀策氏のご教示）も載るくらいなので、輝政＝「クリスチャン」を裏付ける確かな根拠を掴んでなかったとみられます。案内の説明にもあるように、「にの門」鬼瓦十字紋をあえてクリスチャンと関連付けるのなら、池田時代のものとみるべきでしょう。しかし、だからといって、この十字紋がクリスチャンと関係があるとは限りません。

※本号では、ヨハネ・スクルース『播磨の切支丹史』1986を参考にした。

